

こんにちは、独立行政法人 環境再生保全機構（ERCA：エルカ）です。

研究課題の進捗管理・助言・指導を行っているプログラムオフィサー（PO）が、
推進費申請のコツや工夫、注意すべきポイント等を連載でお伝えしています。
令和 8 年度新規課題の応募に向けて、ぜひご活用ください！

■研究における効率性ってなんだ？

そもそも研究なんて世の中では非効率な部類なものでしょう
と大勢の研究者が考えているかもしれません。

しかし、ある意味そうであったとしても、限られた研究資金を最大限に活用して、
環境政策に貢献する成果を効果的に生み出すことに反対する研究者はいないかと思います。

そのために「推進費申請に当たり、結果を出すための良い研究組織と資金計画を作しましょう」
ということになっています。

中でも研究費の資金計画（積算）は、
熟慮やリアリティがおろそかになっているケースは問題です。

リアリティがない積算書を出すと研究全体の評価が低くなります。

例えば、

- ・直接経費と間接経費を合わせた全体の研究費が支援規模上限額を超過している初歩的ミス（この段階で落ちます）
- ・人件費の単価が適当に入れられているケース（通常高すぎる）
- ・毎年 PC を購入しているような毎年同じ内容の単純な積算（実際毎年必要なのか？）
- ・リース期間を研究期間にして単価を作成しているケース
（単価は月額リース料＝リース料総額÷耐用年数÷12 か月）
- ・外注費がサブテーマごとの積算の半分以上（これは原則禁止されている）
- ・目的や単価・人数が不明確または不合理な旅費や謝金、会議費の積算（計画が適当すぎか？）
- ・支援規模上限額にぴったり合わせたような総額（恣意的な匂いがする）
- ・足し算があっていないか、桁が間違っている（研究者にあるまじき行為）

綿密に科学的事実を追及している科学者が申請してくるという前提で積算も評価されますので、
効率性の観点でひと工夫された積算計画が期待されます。

例えば、他の研究費と合わせて高額機器を購入したり、
既存の研究・施設や共同研究により調査コスト削減したりするなど、
できることはやっていきましょう。

積算があまりにも適当である場合は、契約時にも精算時にも問題が生じて、
研究自体を効率的に進める際の大きな障害にもなります。

今回は「審査の観点：効率性」について具体的な所感を添えてのお話でした。

次回は「伝わる申請書の書き方」を配信の予定です。
楽しみにお待ちください。

※本連載では各 PO からのメッセージを連載でお届けしております。
文体や表現方法に違いがある場合がございます。

多くの皆さまの、環境政策へ貢献する研究提案を心よりお待ちしております。

公募期間：9月8日（月）～10月10日（金）14時

<https://krs.bz/erca/c?c=59&m=286&v=d15f7b39>

【公募全般に関するお問合せ先】

suishinhi-koubo@erca.go.jp

件名の先頭に【公募問合せ】と記入していただけますと幸いです。

■独立行政法人 環境再生保全機構（ERCA）

環境研究総合推進部

〒212-8554 神奈川県川崎市幸区大宮町 1310 番

ミューザ川崎セントラルタワー9階

■メールマガジン配信停止について

配信停止を希望される方は、次の配信解除フォームよりお申込みください。

<https://krs.bz/erca/m?f=187>

※このメールは送信専用のメールアドレスから配信されています。

ご返信いただいてもお答えできませんのでご了承ください。

※このメールに関するお問い合わせは下記までお願いいたします。

<https://www.erca.go.jp/erca/mail/index.php?conf=suishinhi>